



工高タイムス

北海道旭川工業
高等学校新聞局
〒078-8804
北海道旭川市緑が丘
東4条1丁目1-1
発行人(局長)
佐々木 晃成
(電気科3年)

ものづくり コンテスト

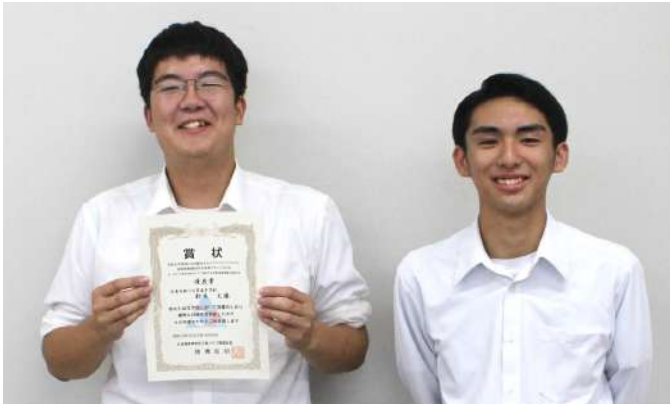
電子機械科

自動車整備部門

鈴木君が5位入賞

「昨年の反省を生かせた」

第24回高校生ものづくりコンテスト北海道ブロック大会自動車整備部門が8月6日に登別の日本工学院北海道専門学校で行なわれ、電子機械科3年生の鈴木太陽君と玉井康太君の2人が出場し、鈴木太陽君は5位で優良賞を受賞した。



5位の鈴木君(左)と玉井君

競技内容は自動車整備の4つの項目の精度と速さを競うものだ。4項目は学科、日常点検、故障探求、測定。練習時間は日曜日を除く週6回で、3〜4時間練習したという。

鈴木君は「本番前は普段通りの力を出せるように緊張せずに臨んだ。ワイパーやタイヤなど日常的に使う部品を点検する日常点検を特に練習し

た。制限時間ギリギリだったが、特に問題なく終えられた。

支部写真展

小堀君の作品が銀賞

人物を入れ構想を練る

銀賞作品「いたずらの瞬間」



高文連上川支部写真展・研究大会の審査会が8月22日に旭川東高校で行なわれ、小堀遙洋君(土3)の「いたずらの瞬間」が銀賞を受賞した。他に小堀君と和田大輝君(建2)、平塚斗真君(建2)、石井琉結さん(機2)の作品

ラグビー部

支部3位で全道へ

少しでも多くトライを

ラグビー部は8月19〜21日に東光スポーツ公園で行なわれた第77回北海道高等学校ラグビーフットボール南・北選

が入選し、計5作品が10月23〜25日に釧路市で行なわれる全道写真展に出品される。

小堀君は「顧問の西野朋和先生から、写真の中に人物を入れた方が良く、アドバイスをされ、構想を練ったのが『いたずらの瞬間』。作品を



カメラを構える小堀君

撮るときフラッシュを使い、半透明のスーパーボールに反射させて全体を明るくした。銀賞の受賞を知ったときは現実味がなかった。北海道新聞に結果が掲載されて実感がわいた」と話した。今後の活動について「就職試験と全道大会の日程が重なったので全道大会には参加できないが、これからも趣味として写真は撮っていく。就職してからコンテストや大会などに写真を出品していきたい」と語った。

谷さんの祖母をモデルにした「トキ子」



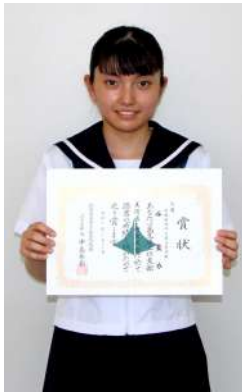
美術部の谷藍衣さん(化1)の油絵「トキ子」が8月28〜30日に旭川市民文化会館で行なわれた高文連上川支部美術展・研究大会で入選し、全道大会に出品される。

谷さんは「温かい日常を切り取った作品にしたいと、祖母が農作業をしている様子を描いた。7月24

谷さんの油絵が入選 温かい日常を切り取る

日に制作を開始して約一か月で完成した。服の模様が細かいチェック柄で大変だったが、入選できて安心した。全道大会はレベルが高いので他の作品を見て色使いやアイデアを吸収したい。会場で他校の先生からのアドバイスももらい学びたい」と語った。

全道大会は旭工が当番校で10月9〜10日に旭川大雪アリーナで行なわれる。



入選した谷さん(化1)

玉井君は「本番は楽しみなが、練習場にはいかなかった。入りに行なったので昨年よりも成長できた」と話した。

手権大会旭川支部予選会に出場して3位となり、全道大会の出場権を獲得した。

高島開成部長(建3)は「私は練習中にケガをして試合に出られなかった。大会では一人ひとりのディフェンスやタックルが甘く、積極的にはなかった」と語った。全道大会に向けて「チーム全体のタックルの強化をしていく。少しでも多くトライできるよ

うに頑張る。3年生は負けたら最後なので悔いを残さない試合にしていきたい。まずは初戦突破を目標に、全力で楽しみながらプレーする」と意気込んでいる。

真鍋快都副部長(土3)は「試合中はタックルやディフェンスがうまくいかなかったのが全道大会までに改善していく。積極的に声を出して後輩たちを引っ張っていく」と話した。全道大会に向けて「1回戦の相手は昨年の全道大会の準決勝で戦った北海道遠軽高等学校だ。そのときは負けたのでリベンジを果たせるように全力を尽くす」と意気込みを話した。



意気込む高島君(左)と真鍋君

全道大会は9月19〜21日に芦別市なまこ山総合運動公園で、決勝戦は28日に札幌市月寒屋外競技場で行なわれる。



工業化学科の2年生は9月5日に旭川市の北海道エネルギー株式会社のカソリンスタンドへ初めてのインターンシップに行き、3班に分かれて実習をした▼まず車の点検方法を教えてもらい、エアラインパクトドライバーを使ってタイヤ交換を行なった。次に会社説明があり、仕事内容と社会人になった時の福利厚生を知った。仕事内容はカソリンの給油、車の定期点検や整備だ。会社で有給休暇が使えるという事も知った。有給休暇を使わせてもらえない会社もあると聞き、有給休暇が取れる所に就職したいと思った▼高校生と社会人の生活について違うのは、高校生にはプライベートの時間が多いが、社会人では趣味やプライベートに使える時間が大幅に短くなるという点。高校生のうちにやりたいことをできる限りやりたいと思った▼最後にカソリンの給油作業と洗車作業をした。給油作業では車のカソリンタンクのふたを開けるときに間違ってボンネットを開けてしまい、恥ずかしかった。洗車作業では講師の方から「ホースを使って遊んでもいいよ」と言われた。私は最初に作業を行なったが、他の人は水を掛け合って、帰りはジャージがびちゃびちゃに濡れていた。また、車に乗って実際に洗車機の動きを見るのは楽しかった。社会人になると趣味に使う時間が減るのは残念だが、優しい先輩たちの指導を受けられてとても良い経験になった。(化2杉野)

支部新聞
研究大会

記事の書き方を学ぶ

全道大会のリハーサルを実施

高文連上川支部新聞研究大会が8月19日に旭川情報ビジネス専門学校で行なわれた。

6校から生徒27人と顧問8人が参加した。
午前は三浦綾子記念文学館



グループで話し合う局員

綾子の生涯を紹介 「氷点」が懸賞公募で入選

三浦綾子記念文学館では綾子の生涯を知ることができる。綾子は戦前に小学校教員として軍国教育に励んでいたが、1945年に日本が敗戦し社

会の価値観が大きく変わった。今まで自分が教えてきたことは間違いだったと分かり、教員を辞めた。その年に肺結核にかかり、入院を繰り返した。

三浦綾子 略歴

1922年4月25日
旭川市4条16丁目で堀田家の次女として誕生
1939年
旭川市立高等女学校卒業
歌志内町と旭川市で7年間
小学校教員を勤める
1946年
軍事主義教育に疑問を抱き
退職、肺結核を発病
1959年5月24日
三浦光世と結婚
1963年
朝日新聞社1000万円懸賞
小説公募に『氷点』を応募
1964年7月10日
『氷点』1位入選
1964年12月9日
朝日新聞朝刊に『氷点』連
載開始
1966年
『氷点』ドラマ・映画化
『信徒の友』に『塩狩峠』
連載開始
1968年
『塩狩峠』の執筆途中から
口述筆記を始める
1994年
「本の窓」に『銃口』連載
開始
1999年10月12日
多臓器不全で逝去。77歳

参加者の声

取材への心構えを知る 吸収して成長していく

高文連上川支部新聞研究大会に参加した他校の局員に感想を聞いた。

他校紙の文構成や レイアウトを勉強

留萌高校の水戸優輔君(2年)は「三浦綾子さんについて知らなかったの、事前にWebで調べ『氷点』という作品を書いた作家だと知った。

取材では三浦さんに関する資料や実際に使用していた書斎などを見ながら説明を受けたので、三浦さんの当時の葛藤や人生観を肌で感ずることができた。度重なる病気にも負

けずに数々の小説を執筆した忍耐力や精神力がすごいと思った」と述べた。また「他校紙は流し記事一つとって見ても文の構成や割付などが工夫さ

全道大会に向けて さらに良い発表を

旭川永嶺高校の瓜屋拓真君(2年)は「高校の読書課題で三浦綾子さんの『塩狩峠』を読んだことがあった。記念文学館には実際に三浦さんが暮らしていた部屋や、病に侵されながらも多くの作品を書

へ取材に行った。本館と分館、見本林の3か所を見学し、そ



質問に答える難波真実さん

た。療養生活中に幼馴染の前川正と再会し交際が始まった。彼の存在は心の支えとなったが、数年後に前川は肺結核で亡くなった。綾子は深く傷ついたが三浦光世に出会い前向きになり、綾子の病気が治ってから結婚した。綾子は朝日新聞社の懸賞公募で小説「氷点」が1位入選した。



三浦夫妻の書斎をそのまま移築

き上げた様子が展示されており、信念を持って書く作家だと思った。事務局長の難波真実さんに三浦さんが教師として自分に絶望したが救い出された経験から命の大切さにとっても重きを置く人だという話を聞いて良かった。戦前から戦中の教員生活から『氷点』の作家として本気で小説家の道を進んでいく意志の強い人だと感じた。体が不自由なのにも負けずに作品を書いた三浦さんを尊敬した」と話した。また「支部大会に参加したのが2回目だったのでスムーズに動けたが、全道大会の発

れぞれ案内人の方から三浦綾子と小説「氷点」の舞台となった見本林についての説明を受けた。その後、事務局長の難波真実さん(51歳)が新聞局員の質問に答えた。

午後からは2つのグループに分かれた。分科会①では新聞顧問の岸美千代先生から記事の書き方の説明を受けた。

分館 夫妻が口述筆記した書斎

綾子直筆の原稿を展示

記念文学館の分館にはカフエ「氷点ラウンジ」と三浦夫妻が口述筆記をした書斎があり、夫の光世が綾子の口述を記した「続・氷点」の原稿、綾子が書いた「氷点」の応募原稿の複製などが展示されている。三浦文学案内人の工藤和恵さんは次のように説明した。

「氷点ラウンジ」と三浦夫妻が口述筆記をした書斎があり、夫の光世が綾子の口述を記した「続・氷点」の原稿、綾子が書いた「氷点」の応募原稿の複製などが展示されている。三浦文学案内人の工藤和恵さんは次のように説明した。

「氷点」の朝日新聞の1位入選で1000万円(現在の約1億円)を手に入れたが、税金に450万円を支払った。残りは綾子の父親が綾子の入院のためにした借金の返済と自分がお世話になった教会などに寄付し、自分たちのために使うことはなく、テレビすらも買わなかった。



発表する永嶺高校の瓜屋拓真君

新聞を作ることの 難しさを実感した

旭川東高校の本田澄玲さん(1年)は「放送局にも加入している。5月の支部大会の朗読部門で三浦綾子さんの『泥流地帯』が課題図書に選ばれていて、その時に初めて三浦さんのことを知った。本館の2階にファンの方々のメッセージが書かれたノートが置かれていて、韓国語や英語で書かれたものもあり、印象的だった。日本を越えて他国に

もファンがいることに旭川人として誇れると思った。三浦さんは様々な苦労をしながらも素敵な方々に囲まれてロマンティックな人生を歩んでいると感じた。取材のあとに作品を読むとより深くのめりこめそう良かった」と語った。また「各高校の新聞はそれぞれに特徴があり、比べてみるとすごくおもしろかった。改めて新聞を作ることの難しさを実感した。全道大会でも学べることは数え切れないほどあると思うので、未熟なりにどんどん吸収して成長していきたい」と話した。

その後3班に分かれ午前中に取材した内容の記事を作成し、完成した記事を発表してお互いに講評しあった。

局長の佐々木晃成君は「三浦綾子さんについて知ることができて、とても勉強になった。午後の分科会では全道大会に向けての練習ができたので、本番への意識が高まった」と話した。